



借金坂



川崎ゆきお

雨が降る坂道だ。その丘の上にイラストレーターの家がある。坂道を徒歩で上がって行くのは老いた画家。マンホールの蓋や道路の白い線などを踏むと、滑りそうだ。

「たまには運動でいいんだ」黒山老画家が呟く。何か発していると楽なのだ。

「こんな坂の上に、よく家を建てたものだ。住みにくいじゃないか」

黒山は自転車で来ようと思ったのだが、雨で傘を差して、この坂道を上るのは嫌だ。降ってなくても、自転車で坂道はしんどい。歩いた方が楽だ。それでバスで近くまで来て、そこから歩いている。

丘の上にモダンだが、少し古くさい形の建物がある。イラストレーター大村のアトリエだ。二人は同郷で、年は大村の方が上。

アトリエが古く見えるのは、建って年月が経つためだ。早い時期に売れ、今は大御所だ。

黒山は勝手にアトリエに入り、大村を捜す。

大村は、そこだけ和室の部屋で寝ていた。

「ああ、黒山君か」

「休んでいたか」

「休憩だ。徹夜でねえ。少し寝ないと、体が持たん」

「家には帰っているのか」

「ああ、二三日駄目だ」

「まだ、忙しいのかい」

「そうなんだ」

「それはいいことだけど」

「ああ、でも、いつまでも売れっ子だと、この年では辛いよ」

「まだ、人気があるんだから、いいじゃないか。僕なんて滅多に売れない。だから、絵が売れたのはいつだったのか、忘れてしまいそうだよ」

「暇で何より」

「逆だろ」

「いや、休みたいのに休めない。眠いのに眠れない」

「僕なんか、寝ている時間の方が長いよ」

「ああ、君の絵の仕事も眠ったままのようだしな」

「まあ、いいけど、体を大事にしないと」

「分かってるけど、これは不幸だなあ」

「仕事があるんだから、幸せじゃないか」

「まあ、そうだけどね」

「手伝いの人には」

「アシスタントとマネージャーは帰らせた。寝たいからね」

「締め切りは大丈夫なの」

「落とした方がいい」

「一度も落とすことがないんだろ」

「こらで落として、信用を落とす方がいい。そうすりゃ仕事が減るだろ。もう十分稼いだ。遊んで暮らせる」

「それよりも」

「ああ、いつものあれだろ」

「今月の家賃がどうしても」

「ああ、分かった」

大村は脱ぎ捨ててあるズボンの後ろポケットから財布を出し、その中から数枚の札を黒山に渡す。

「いつもすまない。きっと返すから」

「ああ」

「これで、一安心だ。この家賃さえ払えば、しばらくは無事だ」

「いいなあ、そのレベル」

「よくないよ」

「幼稚園で絵を教える仕事はどうなった」

「ああ、君の紹介で、行ったやつねえ。助かってるよ」

「まだ、行ってるのかい」

「子供がかわいくてねえ」

「そうかい」

「じゃ、これで失敬する。家主が待ってるから」

「そうなの」

「家主も、この家賃がないと危ないんだ」

「ああ、そうなんだ」

黒山は雨の坂を下って行く。

大村は中二階の窓から、それを見ている。

了